

文化の風が吹くまち ちくしの
文化薫道

問い合わせ先／文化情報発信課(歴史博物館内)

☎(921)8419

一其の二十六

養蚕の広がる風景

「養蚕」は、主に農家の副業として行われていました。

「蚕(かいこ)」とよばれるガの一種を、幼虫から育て、その繭(まゆ)から「生糸」を生産する仕事です。

蚕の卵を業者から買い付け、ふ化をさせ、繭をつくる段階まで育てて工場に出荷しました。

農家の母屋とは別棟の小屋や、家の座敷、仲居などに蚕を育てる蚕棚を作り、そこで蚕を飼育します。

蚕は桑の葉を餌とし、一定の大きさになるまで食べ続けます。桑の葉が尽きるのではないよう餌の調達は欠かせません。時にはこの作業を朝から晩まで行うこともありま

このため、今はほとんど見ることができませんが、市内の各地にたくさん桑の木が植えられていたよう

です。また、蚕は生糸をとるために、人間の生活と密接な関わりを持っていました。とてもデリケートな昆虫であることから、温度管理などにも手間がかかり、その様子は飼育記録などから分かります。

繭は、春から秋の間に数回に分けて採取されるため、農業などの仕事と並行して作業を行わなければなりません。

仕事の負担も大きいものでしたが、生産された繭は製糸会社のなどに出荷され、貴重な収入源となりました。米よ

りも高い値段で出荷できることもあり、人びとは「お蚕さま」と呼んで、大切にしています。

現在、歴史博物館では、冬の企画展「昔のくらし」展を開催中です。本展では、養蚕に使われた道具をはじめ、農業や山仕事の道具・大正から昭和時代にかけての生活用品を展示しています。「仕事」というテーマを焦点に、市民の皆さんから提供していただいたさまざまな民具をご紹介します。ぜひ、ご覧ください。



蚕棚の前で蚕を育てるようす

